

宿横手三波川遺跡

北関東自動車道側道建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1999

高 崎 市
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第247集

宿横手三波川遺跡

北関東自動車道側道建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1999

高 崎 市
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

北関東地域における地域社会、生活基盤施設として重要な役割を果たす北関東自動車道は、本県、栃木県、茨城県の3主要都市を結ぶ延長150kmの高速道路です。既に全線が事業化され、本県でも関越自動車道の高崎J Cと伊勢崎I C間の約15kmの工事が現在行われています。

北関東自動車道本線の外側には、沿線市町村を結ぶ側道が建設されることになりました。平成8年度に沿線市町村のトップを切って、高崎市宿横手町で側道建設工事が始まり、工事対象区域に所在する埋蔵文化財の発掘調査が高崎市より当事業団に委託されました。本線の埋蔵文化財発掘調査と平行して平成8年度、平成9年度の2カ年に分けて平安時代の水田跡等貴重な遺構を調査しました。

北関東自動車道建設に係る埋蔵文化財発掘調査遺跡の調査報告書刊行のための整理業務が始まった本年度、宿横手町の側道で調査した遺跡もその対象となり、この度それが終了いたしました。北関東自動車道側道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査第1集として、ここに「宿横手三波川遺跡」の調査報告書を上梓したく存じます。

発掘調査から調査報告書刊行に至るまで高崎市道路建設課、同教育委員会、日本道路公団、群馬県教育委員会、地元地権者会等には大変お世話になりました。これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本書が地域の歴史を解明するために、十分活用される事を願い序といたします。

平成11年2月28日

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 菅 野 清

例 言

1. 本書は北関東自動車道側道建設工事に伴って行われた宿横手三波川遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 宿横手三波川遺跡は群馬県高崎市宿横手町に所在する。
3. 発掘調査及び整理事業は、高崎市教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施したものである。
4. 発掘調査期間、整理事業期間は以下のとおりである。

発掘調査	平成8年度	平成8年7月1日～平成8年12月31日（調査期間 9月1日～10月31日）
	平成9年度	平成9年12月1日～平成10年3月20日（調査期間 12月1日～12月31日）
整理事業	平成10年10月1日～平成11年2月28日（整理期間 10月1日～11月30日）	
5. 発掘調査、整理事業の体制は以下のとおりである。

常務理事	菅野 清（平成8、9年度）・赤山容造（兼事務局長・平成10年度）
事務局長	原田恒弘（平成8、9年度）
副事務局長	赤山容造（平成9年度）
管理部長	蜂巢 実（平成8年度）・渡辺 健（平成9、10年度）
調査研究第2部長	神保侑史
総務課長	小淵 淳（平成8、9年度）・坂本敏夫（平成10年度）
調査研究第4課長	中東耕志
事務担当	笠原秀樹・国定 均（平成8年度）・井上 剛（平成9年度）・小山建夫（平成10年度）・須田朋子・宮崎忠司・吉田有光・柳岡良宏・岡島伸昌（平成9、10年度）・大澤友治・吉田恵子・松井美智代（平成8年度）・内山佳子・星野美智子（平成8、9年度）・羽鳥京子（平成8、9年度）・菅原淑子（平成8年度）・若田 誠・山口陽子（平成8年度）・佐藤美佐子・本間久美子（平成9、10年度）・北原かおり（平成9、10年度）・本地友美（平成9、10年度）・狩野真子（平成9、10年度）松下次男・浅見宜記・山本正司（平成8年度）・吉田 茂（平成9、10年度）
発掘調査担当	平成8年度 高井佳弘・廣津英一・岩崎琢郎 平成9年度 高井佳弘・岩崎琢郎・今泉 晃
整理担当	岩崎琢郎
整理嘱託員	鹿沼敏子
整理補助員	茂木範子・馬場信子・儘田澄子・横坂英実・石関富美代・萩原妙子
6. 遺構写真撮影は発掘調査担当、遺物写真撮影は佐藤元彦が行った。
7. 遺物の保存処理は関 邦一・土橋まり子・小材浩一・高橋初美が行った。
8. 本書の執筆、編集は岩崎琢郎が行った。なお、第1章第1節は中東耕志が執筆した。
9. 出土遺物、記録資料の一切は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管されている。

凡 例

1. 本遺跡（側道部）の発掘調査は、北関東自動車道建設に伴う宿横手三波川遺跡（本線部）の発掘調査と同時に行われたため、調査区名、遺構名等は本線部と連続して付けた。従って、本報告書内でそれぞれの番号や記号が連続しない場合がある。
2. 調査面名称は、原則として発掘調査の際に手掛かりとした層名を用いた。
3. 遺構名称は、調査面、調査区ごとに付けた。正式には、調査面→調査区→番号→種類の順で表記するが、本文中や遺構全体図中等で省略が可能な場合は、調査面名を省いた簡易な名称を用いた。
 (例) 正式名称：As—A混土下面A1号土坑 本文、遺構全体図等：A1号土坑
4. 挿図の方位記号は、国家座標上の北を基準としている。
5. 遺構全体図は、1/200の縮尺で掲載した。
6. 遺構図の縮尺は、遺構の規模や状況に応じ適切なものを使用した。各図中のスケールを参照されたい。
7. 等高線、断面基準線の数値は海拔高度で示した。
8. 遺構の方位は、北を基準とした傾きを計測した。表記は、東に傾く場合をN—○○°—E、西に傾く場合をN—△△°—Wと表した。この角度は90°を越えない。また、方位が南北方向の場合はN—0°、東西方向の場合はN—90°と表した。なお、これらの表記は溝底面等が傾斜する方向を示すものではない。
9. 位置の表示は、国家座標第IV系に従った。本遺跡の位置は、X=36,000番台、Y=-67,000番台の範囲であり、その下3桁の数値をそのまま用いて以下のように表示した。
 - ①X軸、Y軸の座標を表記する場合、それぞれ「X=○○○」、「Y=△△△」となるが、調査区設定図や遺構全体図等では3桁の数値のみを表示した。
 - ②各地点の座標は、「(X軸座標) — (Y軸座標)」と表記した。
 - ③各遺構の位置は、5mピッチのグリッドを用いて表示した。グリッド名は南東隅の座標で示し、末尾に「グリッド」を示す「G」を付した。また、より正確な位置が必要となる場合は1m単位の座標を用いた。
10. 各テフラ等は以下のように表記した。このうち、榛名山起源のテフラ2種類については、本来ならばそれぞれ「Hr—I」、「Hr—S」の名称を用いるのがふさわしい。しかし、本書では慣例的に広く使われている「Hr—FP」、「Hr—FA」の名称を用いた。また必要に応じて、「A軽石」、「FP火山灰」などのように各テフラ等の性質がわかるような表記も行った。

テフラ等の名称	年代	表記	
浅間A軽石	1783(天明3)年	As—A	または A
浅間Bテフラ	1108(天仁元)年	As—B	または B
榛名二ツ岳伊香保テフラに伴う泥流	6世紀中葉?	Hr—FP泥流	または FP泥流
榛名二ツ岳伊香保テフラ	6世紀中葉	Hr—FP	または FP
榛名二ツ岳波川テフラ	6世紀初頭	Hr—FA	または FA
浅間C軽石	4世紀初頭	As—C	または C

目次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

第1章 調査の経緯・方法・経過

- 第1節 調査に至る経緯 ————— 1
- 第2節 調査区の設定と調査の方法 ————— 2
- 第3節 調査の経過 ————— 3

第2章 遺跡の位置と環境・基本層序

- 第1節 遺跡の位置と環境 ————— 4
- 第2節 基本層序の設定 ————— 4

第3章 各時代の調査

- 第1節 調査概要 ————— 5
- 第2節 近世の調査 ————— 6
- 第3節 中世の調査 ————— 8
- 第4節 古代の調査 ————— 10
- 第5節 古墳時代の調査 ————— 14
- 第6節 古墳時代以前の調査 ————— 16

発掘調査報告書抄録

写真図版

挿図目次

〔第1・2章〕	
第1図	宿横手三波川遺跡位置図 1
第2図	宿横手三波川遺跡調査区設定図 2
第3図	宿横手三波川遺跡基本土層図 4
〔近世の調査〕	
第4図	As—A混土下面全体図 6
第5図	B2号区画農具痕平・断面図 7
第6図	近世遺物図 7
〔中世の調査〕	
第7図	中世第1面全体図 8
第8図	中世第2面全体図 9
〔古代の調査〕	
第9図	B1号溝断面図 10
第10図	B9号土坑平・断面図 10
第11図	灰色粘土下面B3・B4号溝断面図 11
第12図	E8号溝（道状遺構）底部ビット列断面図 11
第13図	As—B下面全体図 12・13
第14図	灰色粘土下面B3・B4号溝平面図 12
〔古墳時代の調査〕	
第15図	Hr—FP泥流/Hr—FP下面全体図 14
第16図	Hr—FA下面全体図 14
第17図	As—C混土面全体図 15
第18図	古墳時代遺物図 15
〔古墳時代以前の調査〕	
第19図	灰色粘土下面全体図 16
第20図	B1号溝断面図 16
第21図	A2号土坑平・断面図 17
第22図	灰色シルト面全体図 18・19

写真目次

PL.—1

1. As—A混土下面B区南部全景
2. As—A混土下面B4号区画農具痕（南西より）
3. 中世第1面E区全景
4. 中世第1面E区サク状遺構（南より）
5. 中世第2面E区全景

PL.—2

1. As—B下面A区全景
2. As—B下面B区南部全景
3. As—B下面B区南部近撮（南より）
4. As—B下面B9号土坑全景（南より）
5. 灰色粘土下面B3・B4号溝全景（東より）

PL.—3

1. As—B下面E区全景
2. As—B下面E南北1号畦付近近撮（南より）
3. As—B下面E8号溝底部ビット列全景（南より）
4. Hr—FP泥流/Hr—FP下面E区全景
5. Hr—FP泥流/Hr—FP下面E区近撮（東より）

PL.—4

1. Hr—FA下面E区全景（北東より）
2. As—C混土面E区全景
3. As—C混土面E区近撮（南東より）
4. 灰色粘土下面A区全景（南西より）
5. 灰色粘土下面B1号溝全景（西より）
6. 近世出土遺物
7. 古墳時代出土遺物

第1章 調査の経緯・方法・経過

第1節 調査に至る経緯

北関東自動車道建設に伴って高崎市は、側道建設を予定した。これに伴い、群馬県教育委員会文化財保護課では日本道路公団と契約のもと、本線部分の発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託契約し、本遺跡の発掘調査が既に実施されていた。よって、平成8年に県教育委員会と高崎市教育委員会、同建設部土木課と、調査主体の同事業団での調査実施の協議をおこなった。その結果、本線部分の調査と一体とし、高崎市の委託事業として、県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査及び整理事業を実施することになった。発掘調査は平成8年度と平成9年度に実施し、整理事業は平成10年度に実施することになった。

平成8年度については、高崎市と県埋蔵文化財調査事業団の間で、6月25日付けで契約を締結した。履行期間が平成8年7月1日から同年12月31日のうち、調査期間は9月1日から10月31日の2ヶ月間でA区とB区を調査した。平成9年度については、11月28日付けで契約締結し、履行期間が平成9年12月1日から平成10年3月20日のうち、調査期間は12月1日から31日の1ヶ月間でE区を調査した。さらに、平成10年10月1日付けで整理事業に関する契約を締結した。履行期間は平成10年10月1日から平成11年2月28日のうち、10月1日から11月30日の2ヶ月間で実施することになった。



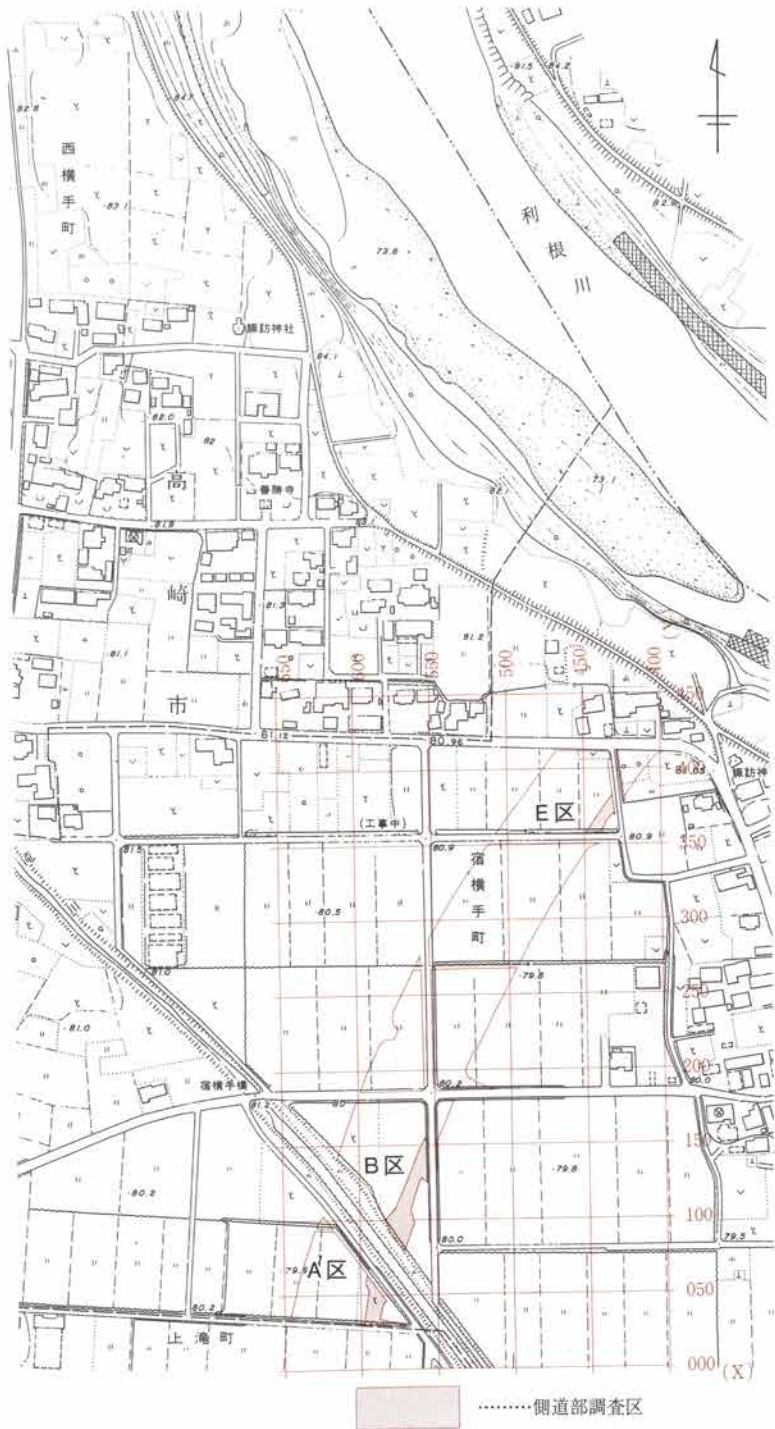
第1図 宿横手三波川遺跡位置図（国土地理院 20万分の1地勢図「宇都宮」「長野」使用）

第2節 調査区の設定と調査の方法

調査区の設定は本線部と共通の方法で行った。遺跡内を東西方向の道路や水路で区切った区画をそのまま用い、南からA区～E区とした。従って、市道部の調査区はA区、B区、E区の3区画となる。

次に調査方法について、基本的な事項を記す。

- 1 調査の効率を考え、原則として本線部と同時に調査を行った。
- 2 各時代のテフラ層、洪水起源の層等に着目し、各層の下面や内部で遺構確認を試みた。
- 3 表土や各層の掘削にはバックホーを用いた。ただし、層中から遺構や遺物の出土が予想される場合など、状況に応じて人力による掘削も適宜行った。
- 4 各面ごとに遺構の性格、残存状態等が異なるため、それぞれに適した方法で遺構確認作業を行った。
- 5 平面測量は、空中写真測量を測量業者（技研測量設計株式会社・株式会社測研）に委託して行った。また出土した遺構の状況を考え、平板測量も適宜行った。縮尺は、それぞれ1/40を原則とした。
- 6 遺構の調査では、溝や土坑などの断面図は1/20を原則とした。
- 7 記録写真の撮影は35mm、6×7判のモノクロ及び35mmのリバーサルを用いた。各区の全景や、広範囲の遺構に対しては、気球や高所作業車からの撮影を行った。



第2図 宿横手三波川遺跡調査区設定図

第3節 調査の経過

調査は、平成8年より始められた。本線部の工事行程上、滝川に架けられる「滝川橋」部分が優先されることから、該当するA区及びB区南部の調査を行った。その後、B区北部の調査を行った。平成9年度は、残るE区を調査した。

以下に発掘調査の内容を順を追って示す。

[平成8年度]

- ① A区、As—A 混土層下面の調査。遺構は確認できない。
- ② B区南部、As—A 混土層下面の調査。農具痕の残る水田跡を確認。
- ③ B区南部、As—B層下面の調査。水田跡・溝・土坑を確認。
- ④ B区南部、As—B層下面の水田基盤層を除去。下面（暗灰色シルト層）で溝等を確認。
- ⑤ A区、As—B層下面の調査。水田跡を確認。
- ⑥ A区、As—B層下面の水田基盤層を除去。下面（暗灰色シルト層）で溝、土坑等を確認。
- ⑦ B区南部、灰色シルト層の調査。溝、倒木痕を確認。
- ⑧ A区、灰色シルト層の調査。倒木痕を確認。
- ⑨ A区・B区南部、下層確認のためトレンチ調査。遺構は確認できないためA区・B区南部の調査終了。
- ⑩ B区北部、As—A 混土層下面から遺構は確認できない。As—B層下面から水田跡を確認。
- ⑪ B区北部、As—B層下の水田基盤層を除去。遺構は確認できない。灰色シルト層では溝、倒木痕を確認。B区北部の調査終了。

[平成9年度]

- ① E区、As—A 混土層下面の調査。遺構は確認できない。
- ② E区、灰褐色～明褐色土層の調査。層内の上位部の洪水層下面から畠跡を確認。
- ③ E区、灰褐色～明褐色土層の調査。層内の下位部の洪水層下面から溝を確認。
- ④ E区、As—B層下面の調査。水田跡・溝（道状遺構）を確認。
- ⑤ E区、As—B層下面の水田基盤層を除去。下面（Hr—FP 泥流層）では、As—B下面の遺構基底部以外は確認できない。
- ⑥ E区、Hr—FP 泥流層及びHr—FP層下面の調査。水田跡を確認。
- ⑦ E区、Hr—FA下面の調査。水田痕跡を確認。
- ⑧ E区、As—C 混土面の調査。水田跡を確認。
- ⑨ E区、灰色シルト面の調査。溝を確認。
- ⑩ E区、下層確認のためトレンチ調査。遺構は確認できないためE区の調査終了。

第2章 遺跡の位置と環境・基本層序

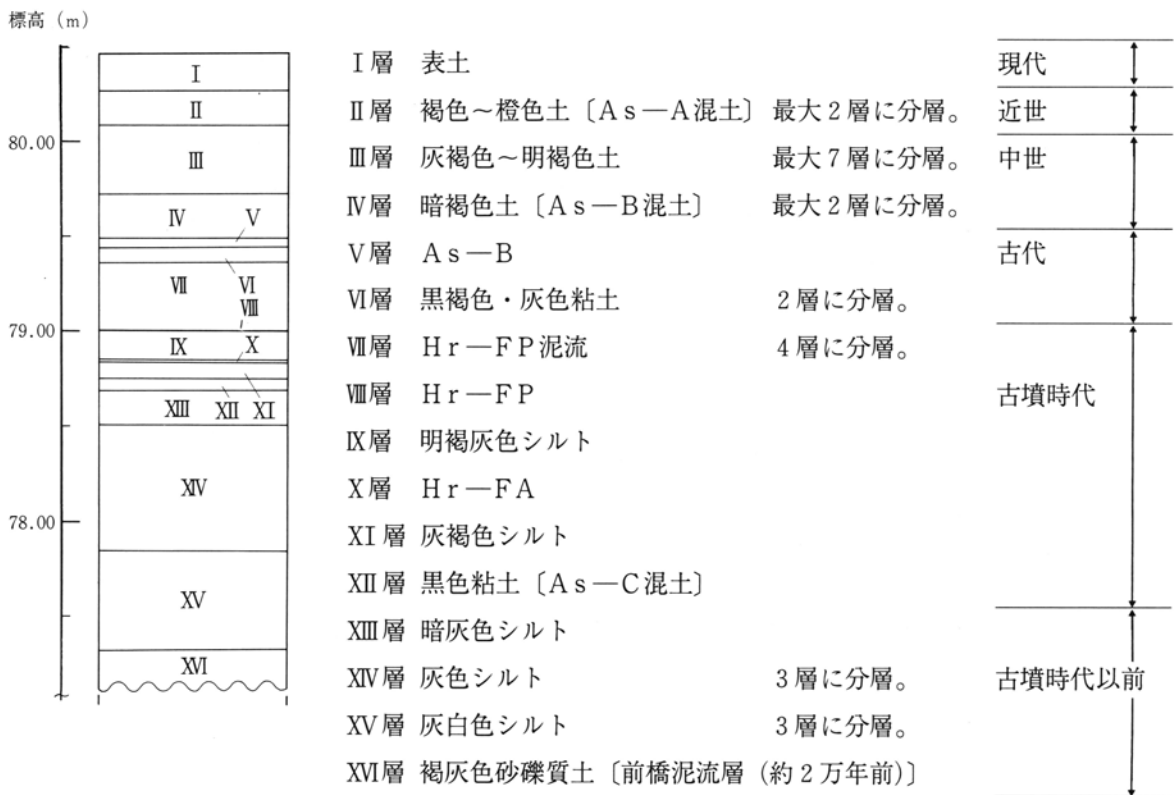
第1節 遺跡の位置と環境

宿横手三波川遺跡は、高崎市を中心部から東へ約4.5kmの宿横手町に所在し、利根川右岸の前橋台地上に位置する。標高は約80mである。北西から南東方向にごく僅かに傾斜しているが、ほぼ平坦といってよい。遺跡周辺は水田地帯であり、北西に西横手町の集落、北・東には宿横手町の集落が展開する。遺跡内南部には近世に開削された滝川（天狗岩用水）が北西から南東方向に流れ、周辺の水田を潤している。

第2節 基本層序の設定

本遺跡の基本層序を第3図に示す。各時代のテフラ層や洪水起源の層が多く堆積しており、本遺跡の周辺地域が火山災害や大小の洪水災害を繰り返し受けてきたことが判る。

これらの層の堆積状態は、各調査区で大きな差異がある。まず、Ⅶ～Ⅻ層はA・B区では確認できない。また、Ⅲ層は複数回の洪水により形成されたものであるが、それぞれの層を調査区間で対応させることは不可能である。さらに、本来ならばⅡ～Ⅲ層間にはAs—Aが、Ⅻ～Ⅼ層間にはAs—Cがそれぞれ堆積していたはずであるが、後世の攪拌等により現在では確認できないものと考えられる。このように土層の堆積状況が複雑になった原因については、それぞれの洪水の規模の違いの他に、旧地形に起伏があったことで各層が一様には堆積しなかったこと、また、土地を耕地として利用し続けたことで土層が常に人為的な攪拌を受けてきたこと等の可能性が考えられよう。



第3図 宿横手三波川遺跡基本土層図

第3章 各時代の調査

第1節 調査概要

本遺跡の土層は第2章第2節に示したとおり、テフラ層、テフラ混土層、洪水起源の層等が十数層堆積する状態である。断面観察やトレンチ調査により、各層下面や層内に遺構が存在する可能性を判断して調査を進めた。予想される遺構は、近世から古墳時代の水田・畠跡である。

まず、近世の調査ではAs—A混土（Ⅱ層）、中世の調査では灰褐色～明褐色土（Ⅲ層）中の各層、古代の調査ではAs—B（Ⅴ層）と黒褐色・灰色粘土（Ⅵ層）に着目し、各層を除去して遺構確認を行った。また、古墳時代の調査ではHr—FP泥流（Ⅶ層）とHr—FP（Ⅷ層）、Hr—FA（Ⅹ層）、As—C混土（Ⅻ層）に着目し、各層の状態に応じて遺構確認を行った。さらに古墳時代以前の面として灰色シルト（ⅩⅣ層）上面で遺構確認を行った。概略を以下に示す。

〔近世の調査〕

Ⅱ層下面ではB区南部で水田跡を確認した。殆どの区画に農具痕が残存するが、これは農具が通常より深くに及んだものと考えられる。従って、この水田跡の耕作面はより上位に存在したものと思われ、確認されたのはA軽石を含む耕土を除去した状態、いわば「水田基底部」と考えられる。

〔中世の調査〕

Ⅲ層は複数の洪水により形成されたと考えられる。E区では、層内の2面で遺構が確認された。上位面では畠跡と思われるサク状遺構、下位面では溝2条をそれぞれ確認した。層序から両面とも中世の遺構の可能性が高いと判断した。

〔古代の調査〕

As—B（Ⅴ層）はE区の一部を除き全区に堆積する。この層下面から全区で水田跡を確認した。これはAs—B噴火当時の水田である。また直下のⅥ層も遺跡内全体に堆積する。洪水起源の層であり、堆積後かなりの攪拌を受けた様子が認められる。この層下面のA・B区では暗灰色シルト（ⅩⅢ層）に掘り込まれた溝や土坑等を確認した。大部分の遺構の年代は不明であり、層序からは古墳時代以前の遺構も含まれる可能性が考えられる。

〔古墳時代の調査〕

古墳時代の調査はE区のみで行われた。

FP泥流（Ⅶ層）は火山性泥流であり、堆積状況は良好である。下位には降下火山灰のFP（Ⅷ層）薄層が堆積する。これらの層下面から水田跡を確認した。これはHr—FP噴火当時の水田である。

FA（Ⅹ層）は降下火山灰層であるが、残存状態は極めて悪い。この層と確認面との土色の違いにより畦畔痕跡を確認した。これはHr—FA噴火当時の水田の痕跡であると考えられる。

Ⅻ層中位からは土色の違いにより水田跡を確認した。Ⅻ層は洪水起源のものとは考えられないことから、この水田跡も洪水に被覆された状態ではなく、C軽石を耕土に含む水田の下位部である可能性が強い。

〔古墳時代以前の調査〕

最終面であるⅩⅣ層上面では倒木痕、溝を確認した。いずれも年代は不明であるが、本遺跡周辺が水田化される以前の環境を示唆するものである。この面の調査終了後、前橋泥流（ⅩⅥ層）上部に至る確認トレンチを設定し調査したが遺構、遺物は確認されなかった。

第2節 近世の調査

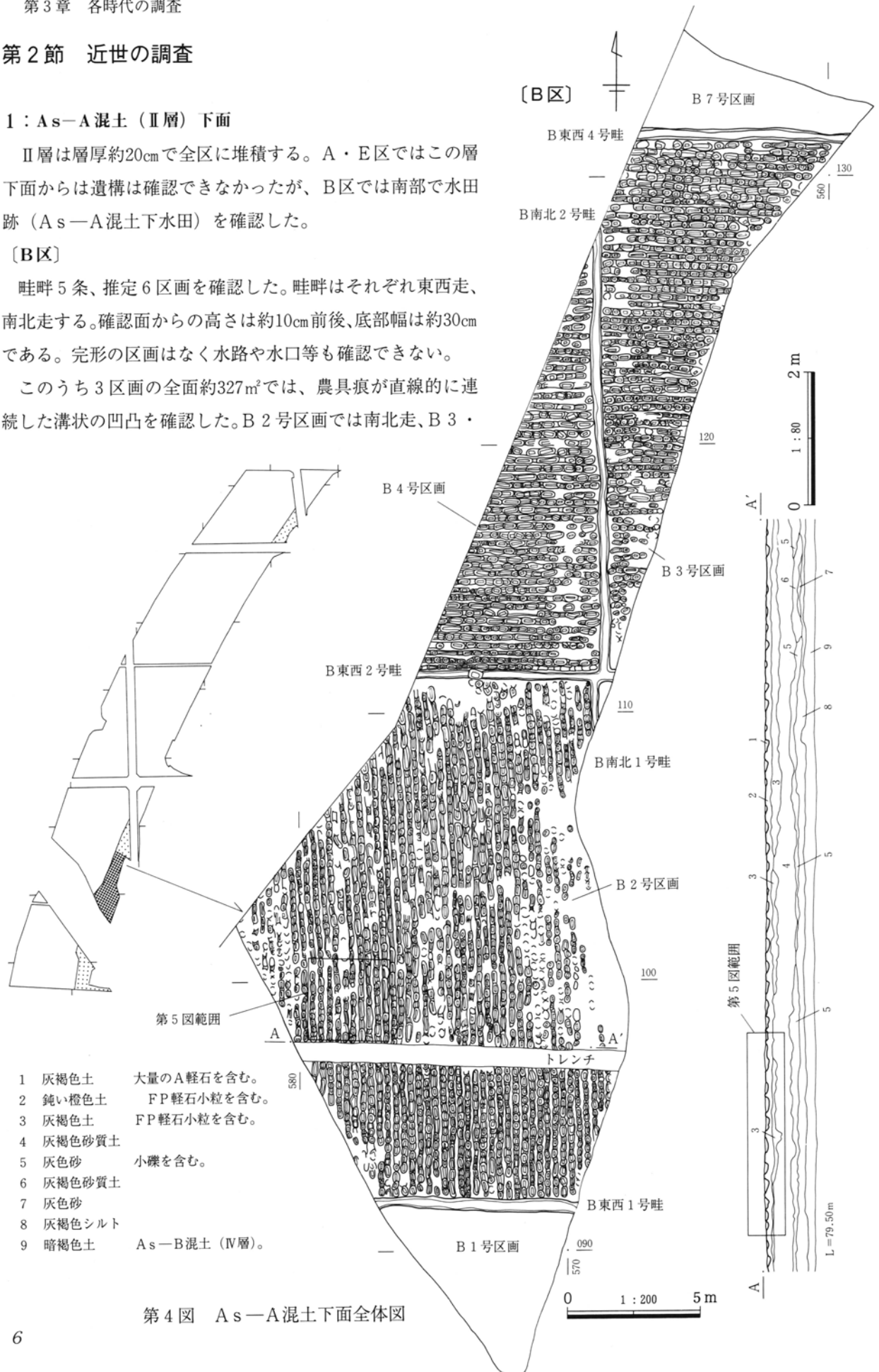
1: As-A混土(Ⅱ層)下面

Ⅱ層は層厚約20cmで全区に堆積する。A・E区ではこの層下面からは遺構は確認できなかったが、B区では南部で水田跡(A s—A混土下水田)を確認した。

〔B区〕

畦畔5条、推定6区画を確認した。畦畔はそれぞれ東西走、南北走する。確認面からの高さは約10cm前後、底部幅は約30cmである。完形の区画はなく水路や水口等も確認できない。

このうち3区画の全面約327㎡では、農具痕が直線的に連続した溝状の凹凸を確認した。B 2号区画では南北走、B 3・



- | | |
|----------|-------------|
| 1 灰褐色土 | 大量のA軽石を含む。 |
| 2 鈍い橙色土 | FP軽石小粒を含む。 |
| 3 灰褐色土 | FP軽石小粒を含む。 |
| 4 灰褐色砂質土 | |
| 5 灰色砂 | 小礫を含む。 |
| 6 灰褐色砂質土 | |
| 7 灰色砂 | |
| 8 灰褐色シルト | |
| 9 暗褐色土 | As—B混土(Ⅳ層)。 |

第4図 As—A混土下面全体図

B4号区画では東西走し、約10cm間隔で平行している。農具痕は楕円形に変形するが状態が良好な部分では細長い長方形を呈し、幅約20cm前後の四角い刃先を持つスキ（鋤）類が使用されたことが想像できる。また、農具痕による溝の断面はV字形を呈しており、農具の刃を傾けて突き込むか、突き込んだ後左右に返すかした様子が分かる。これらの特徴から、使用された農具は大型の深耕用農具である「エンガ（柄鋤）」が想定できよう。

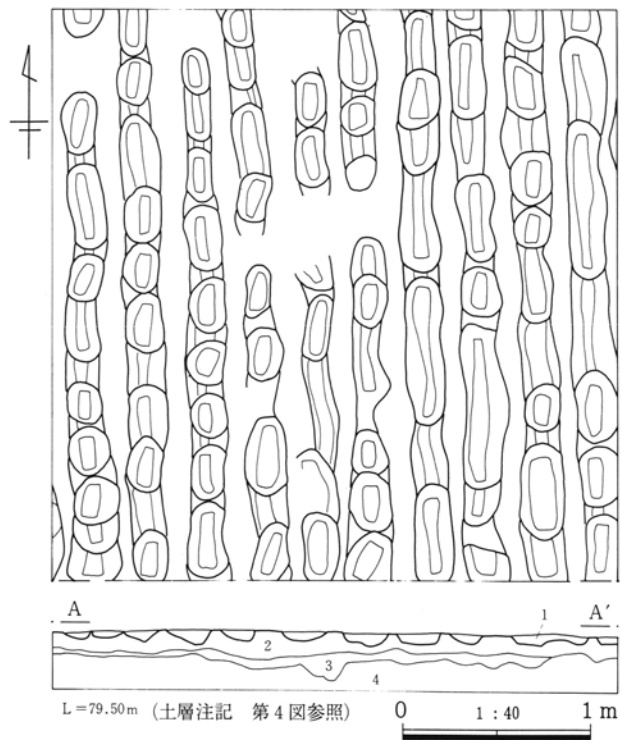
この農具痕は、農具が通常より深部に及んだために残存したものと考えられる。従って、この水田跡の耕作面はより上位にあり、確認した面は耕土の下面、いわば「水田基底部」である可能性が強い。Ⅱ層はこれらの水田の耕土と考えられ、天明3（1783）年に降下したA軽石が当時の耕土と攪拌されて形成されたものと思われる。水田の造成や廃絶の時期は不明であるが、As—A噴火以前からの継続が当然考えられる。

また、農具痕が一連の作業のものとして確認できた要因として、農具が深部に及んだ点に加え、この作業が一回性のものであり、その後の農具痕と重複しなかった点も挙げられる。これらは一連の作業の特徴を示すものでもある。水田を耕土下部まで耕作した場合、床土は破壊され保水が困難になる。従って、この一連の作業は水田を畠に転化するために行われた可能性が考えられる。その原因としては、As—A噴火による水田の被災が想定できる。しかし、耕土にA軽石を含んだ水田も機能していた事例も多く、断定はできない。農具痕が残る区画の使用状態については今後の課題となろう。

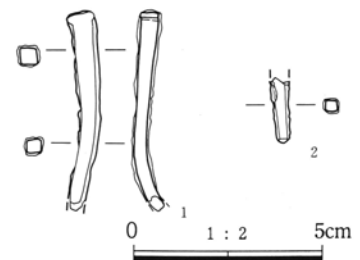
一方、この農具痕をA軽石復旧跡として検討する必要もある。A軽石を水田基底部に鋤き込んで処理したとすれば、前述した作業の特徴とは矛盾しない。しかし、鋤き込まれたA軽石の量が少なく、処理された状態ではない点が問題となる。また、本遺跡周辺ではA軽石を土坑に埋めたり、耕地の隅に集めて山にしたりして処理しており、水田全面に鋤き込むという効率の悪い方法を採用する理由が見出せない。水田面に処理しきれないA軽石が堆積していたため通常より深く耕作された可能性は否定できないが、この場合、土坑に埋めたり集めて山にしたりする処理方法と同レベルのものとは言い難い。As—A噴火後の被災水田の復旧についても、今後より具体的に検討する必要がある。

2：近世の遺物

遺構が確認されなかったB区北部で、Ⅱ層下面より鉄製角釘2点が出土した。1点は残存長5.4cm、厚さ0.5cmで、下部が屈曲する（第6図1）。もう1点は残存長1.7cm、厚さ0.3cmである（第6図2）。この2点は同一個体の可能性がある。



第5図 B2号区画農具痕平・断面図



第6図 近世遺物図

第3節 中世の調査

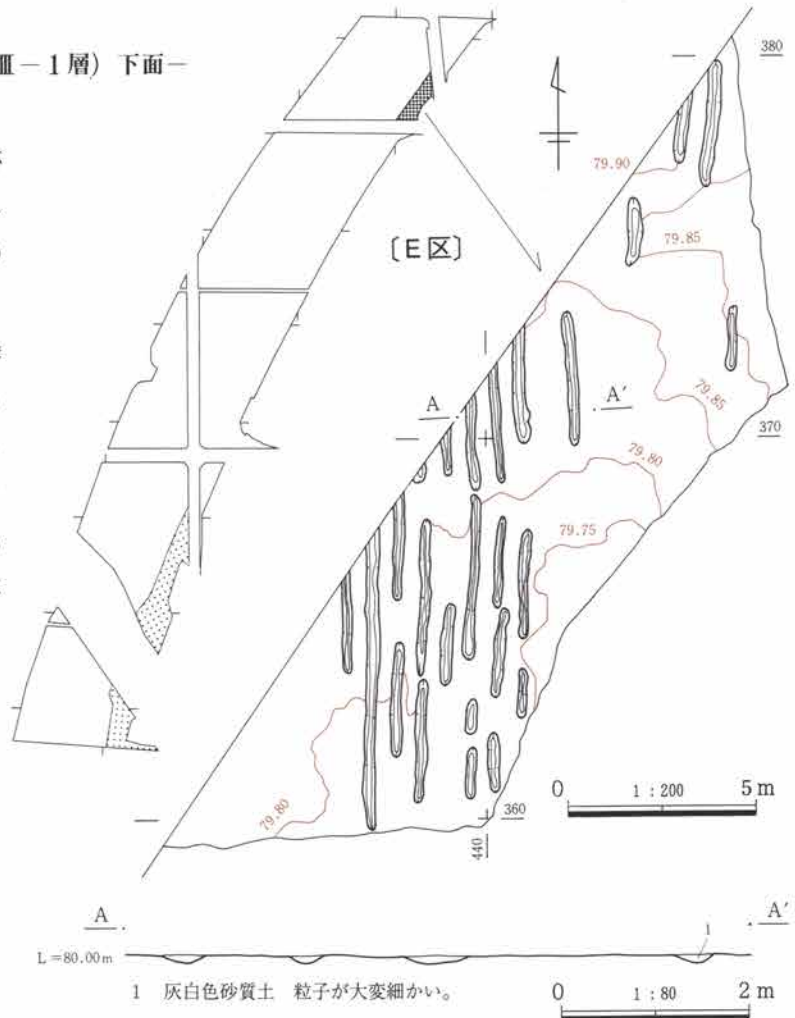
1：灰褐色～明褐色土（Ⅲ層）の状況

Ⅲ層は灰褐色～明褐色を呈し、複数回の洪水により形成されたと考えられる。A区では層厚約50cm、B区では層厚約45cmで堆積する。それぞれ7層、2層に分層でき、いずれも砂質土である。As—A混土（Ⅱ層）下面の調査後にトレンチを設定し調査した結果、遺構は確認できず、面としての調査は行わなかった。しかし、その後A区東壁で畦状の高まりが確認され、残存度の低い水田跡が一部に存在した可能性も考えられる。

一方、E区でのⅢ層の層厚は約40cmであり、4層に分層できる。上位から、灰褐色砂質土（大量の灰色砂粒を含む。層厚約20cm。Ⅲ—1層）、灰褐色土（灰色砂、FP軽石小粒を含む。層厚約10cm。Ⅲ—2層）、暗灰色砂質土（大量の灰色砂を含む。層厚約7cm。Ⅲ—3層）が堆積し、またⅢ—3層とAs—B混土（Ⅳ層）の間には、橙色砂（鉄分を含む。層厚約5cm。Ⅲ—4層）が部分的に堆積している。断面観察により、Ⅲ—1層下面とⅢ—3・4層下面に遺構の存在が予想された。各面の年代は不明であるが、Ⅲ層がAs—B降下（天仁元・1108年）以降、As—A降下（天明3・1783年）以前の層であり、両面とも中世の可能性が強いと判断した。なお、調査面の名称は上位面を「中世第1面」、下位面を「中世第2面」とした。

2：中世第1面 —灰褐色砂質土（Ⅲ—1層）下面—
〔E区〕

調査区中央部から北東部で、畝跡と考えられるサク状遺構を確認した。畝の形状は不明である。1条のサクは幅20～30cm、深さ3～7cm、走向は南北を示す。条数は推定13条であるが、殆どのサクが断続することから、他にも削平のため確認できないものがあると考えられる。サク間幅は、残存の良好な部分で約70cm前後である。遺物は出土せず年代は不明である。



第7図 中世第1面全体図

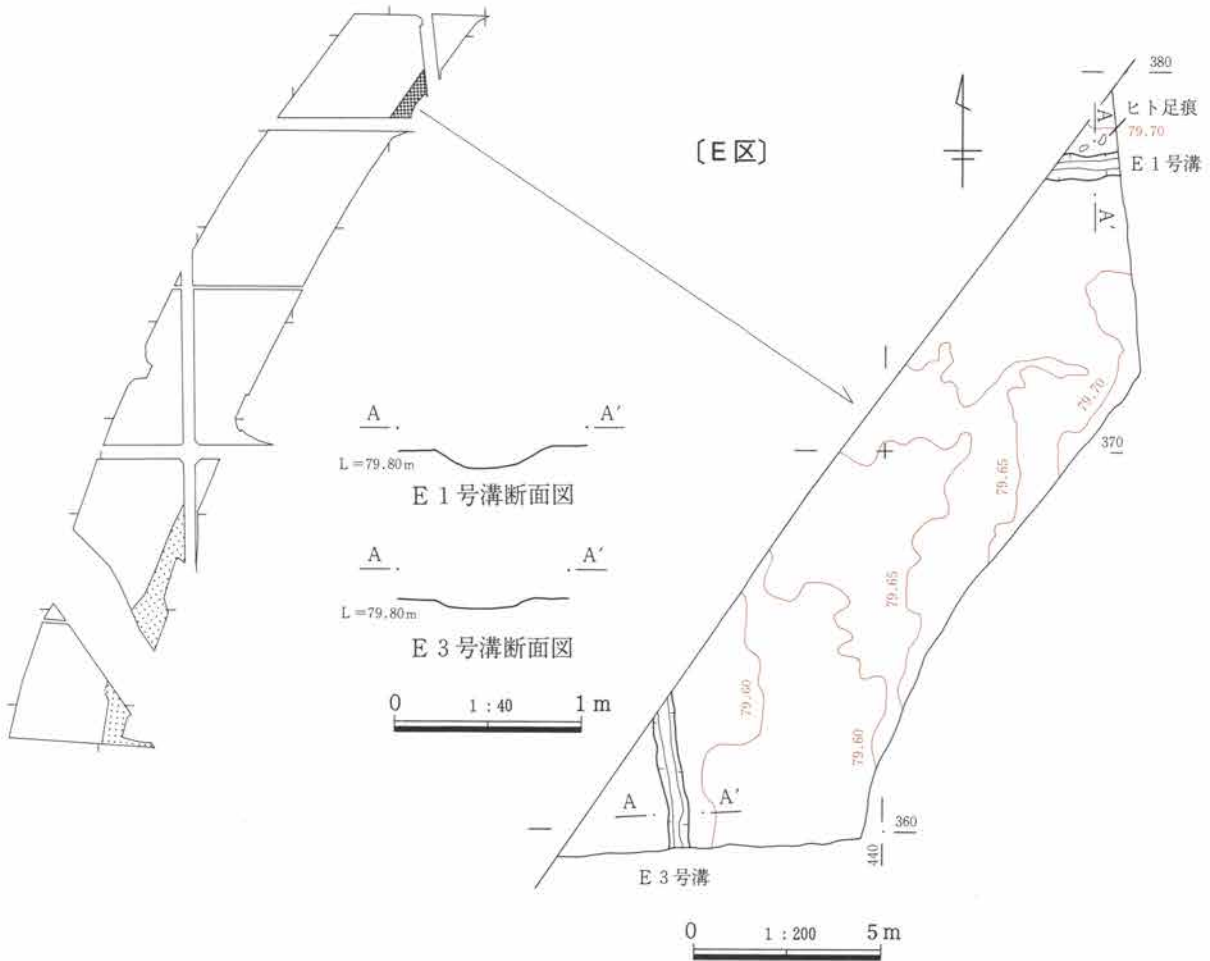
3：中世第2面 一暗灰色砂質土（Ⅲ-3層）・橙色砂（Ⅲ-4層）下面一

〔E区〕

調査区北東隅、南西隅より溝2条を確認した。それぞれほぼ東西走、南北走する。また、E1号溝の北側ではヒトの足痕が見つかっている。畦畔や畝が残存していないために詳しい考察はできないが、この面には水田・畠が存在したものの、後に削平を受けて確認できなくなったものと考えられる。E1・E3号溝は調査区外の北西部で直交することも想像でき、水田・畠を区画したものか、または用水路として使用されたものかの可能性が考えられる。中世第1面のサク状遺構との関連も含め、中世における土地利用については今後の課題となろう。なお、この面でも遺物は出土せず年代は不明である。

E1号溝 調査区北東隅の375—430G～375—435Gに位置し、直線的にほぼ東西走する溝である。走向は、N—88°—Eを示す。確認長1.7m、幅52～60cm、深さ11.5cmで、断面は浅い皿状を呈する。埋土は褐灰色土で、斑状の灰褐色、赤褐色砂質土を含む。

E3号溝 調査区南西隅の355—455G～360—445Gに位置し、直線的にほぼ南北走する溝である。走向は、N—5°30'—Wを示す。確認長3.8m、幅40～66cm、深さ3.7～7.2cmで、断面は浅い箱形を呈する。埋土は明灰褐色土で、B軽石や斑状の橙色土を含む。



第8図 中世第2面全体図

第4節 古代の調査

1 : As-B (V層) 下面

V層はE区の一部で確認できない以外は、層厚約5cmでほぼ全区に堆積する。大部分は暗灰色軽石(B軽石)であるが、底部に黒色火山灰(B火山灰)薄層が堆積することから1次堆積層であることが判る。この層直下から各区で水田跡を確認した(As-B下水田)。これは天仁元(1108)年のAs-B噴火当時の水田面である。畦畔は東西走、南北走し、耕作面からの高さ約5cm前後、底部幅は約50cm~1mである。全面に小規模な凹凸が無数に見られるが、一部で馬蹄痕を確認した以外には性格は不明である。耕土は黒褐色・灰色粘土(VI層)である。この層は、層厚約15cmで全区に堆積する。洪水起源の層と考えられるが、具体的な年代は不明である。層内にはFP軽石の小粒や砂粒を均一に含み、堆積後かなりの攪拌を受けた様子が判る。この層の上半部は黒褐色粘土(VI-1層)であり、下半部の灰色粘土(VI-2層)が変色したものである。この2層間には漸移的な部分も認められる。また、明確な水田床土の形成は認められない。

また、一般的にはAs-Bに被覆された水田跡はいわゆる「条里型水田」である事例が多いが、本遺跡内では確認できなかった。遺跡周辺地域での「条里型水田」の存在については、今後の検討課題となろう。

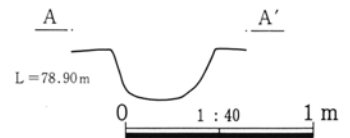
[A区]

畦畔3条、推定3区画を確認した。耕作面に円形や楕円形状の窪みが見られるがいずれも浅く、性格も不明である。

[B区]

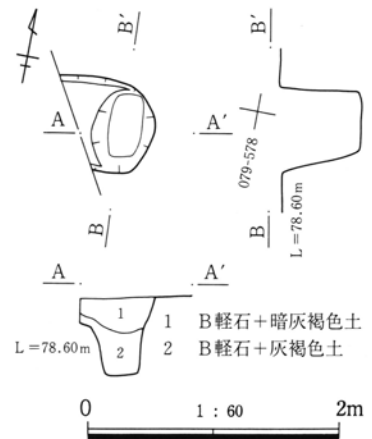
畦畔6条、推定9区画を確認した。中央部を東西走するB東西5号畦は幅約1.5mと大規模であり、条里型地割に於ける「坪」を規定したもの、いわゆる「坪畦畔」である可能性がある。またVI-2層除去後、この畦畔直下に平行して東西走する溝2条を確認した(灰色粘土下面B3・B4号溝)。確認面は、暗灰色シルト(XIII層)上面である。これらの溝はB東西5号畦の造成時に掘り込まれたことも推測できるが、確認面が異なるため直接的な関係は不明である。他に溝1条、土坑1基を確認した。

B1号溝 調査区中央部の125-560G~125-565Gに位置し、B東西5号畦の南側約60cmに平行して東西走する溝である。走方向はN-89°-Wを示す。確認長7.5m、幅54cm、深さ29cmで断面は逆台形を呈する。埋土は、褐灰色土で上部は黒褐色でありVI-1層と似る。V層除去の時点では浅い窪み状であり、As-B降下時には廃絶していたと考えられる。



第9図 B1号溝断面図

B9号土坑 調査区南隅の095-575Gに位置する。南東は調査区域外に及ぶが、長径約90cm、短径62cm、深さ62cmの長楕円形の土坑になる。長径方向はN-90°である。2基の土坑が重複する状態であり別々に掘削されたと思われる。As-B降下以降のものである。



第10図 B9号土坑平・断面図

灰色粘土下面B3号溝 調査区中央部の125・130-560G~125・130-565Gに位置し、直線的に東西走する溝である。走方向はN-90°を示す。確認長7.6m、幅34cm~1.2m、深さ15cmで、断面は逆台形を呈する。埋土は灰白色土で粘性を持つ。

灰色粘土下面B 4号溝 調査区中央部の130—560 G～130—565 Gに位置し、断続的に東西走る溝である。南側の灰色粘土下面3号溝と心々距離で約2.5mで並走する。走向はN—90°を示す。確認長約6.6m、幅80cm、深さ15cmで断面は逆台形を呈する。埋土は灰白色土で粘性を持つ。

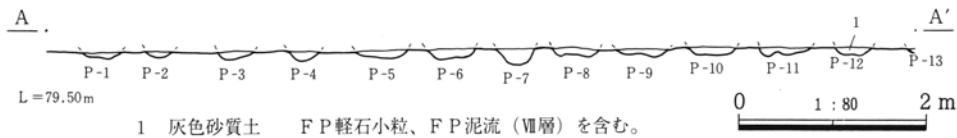


第11図 灰色粘土下面B 3・B 4号溝断面図

〔E区〕

畦畔4条、推定4区画を確認した。中央に位置するE南北1号畦は最大幅約2.5mである。中央部が溝状に窪む他、南西部に高まりがあるなど不規則な形状を呈する。さらに、馬蹄痕と思われる痕跡を多数確認した。他に溝1条を確認した。

E 8号溝（道状遺構） 調査区西部の355—440 G～365—440 Gに位置する遺構である。緩やかな曲線状を呈し、全体的な走向はN—11°—Eである。確認長は9.5mである。V層除去の時点ではごく浅い窪み状であったが、VI—2層除去後、直下にピット列を確認した。ピットは13基で、それぞれ不正円形を呈し平均の径約47cm、深さ約8cmである。確認面は、FP泥流（VII層）であるが、実際はより上位から掘り込まれていたと考えられる。このピット列は一般的に古代道路の調査の際に道路底部に見られる、いわゆる「波板状凹凸面」の一種に類似する。しかし、本遺構では道路の具体的な構造は確認できなかった。なお、最南部のピットP—1から土師器杯（第18図）が出土した。古墳時代のもと考えられ、本章第5節に記載した。



第12図 E 8号溝（道状遺構）底部ピット列断面図

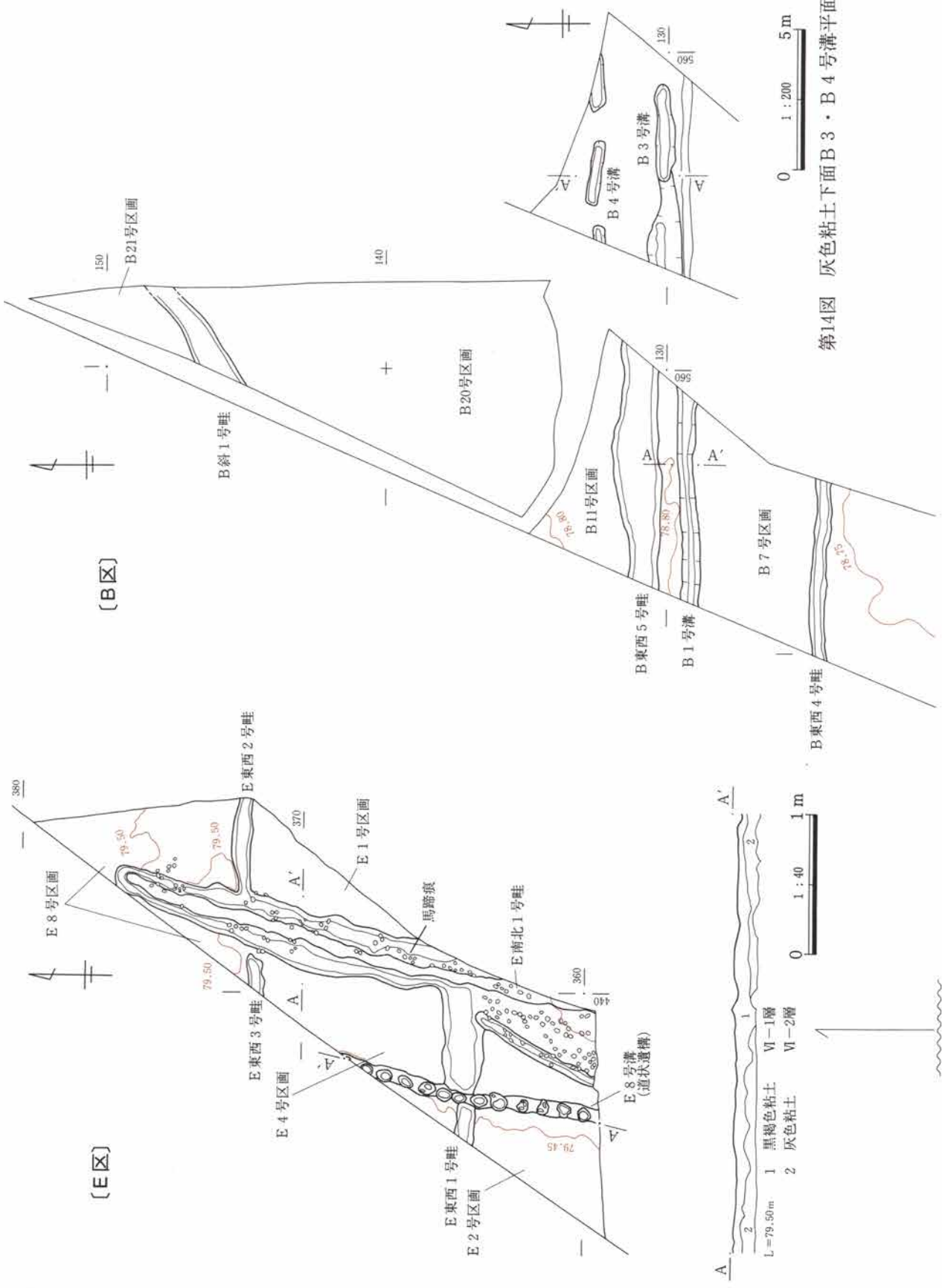
2：灰色粘土（VI—2層）下面の状況

V層下面の調査後にトレンチ調査や断面観察を行ったところ、As—B下水田の耕土層下半部であるVI—2層の下位には、E区ではFP泥流（VII層）からAs—C混土（XII層）までの古墳時代の層の堆積が確認された。しかし、A・B区ではこれらの層は欠如し、古墳時代以前の層の可能性もある暗灰色シルト（XIII層）が堆積している。また、奈良～平安中期のもの判断できる面は全区で残存していない。

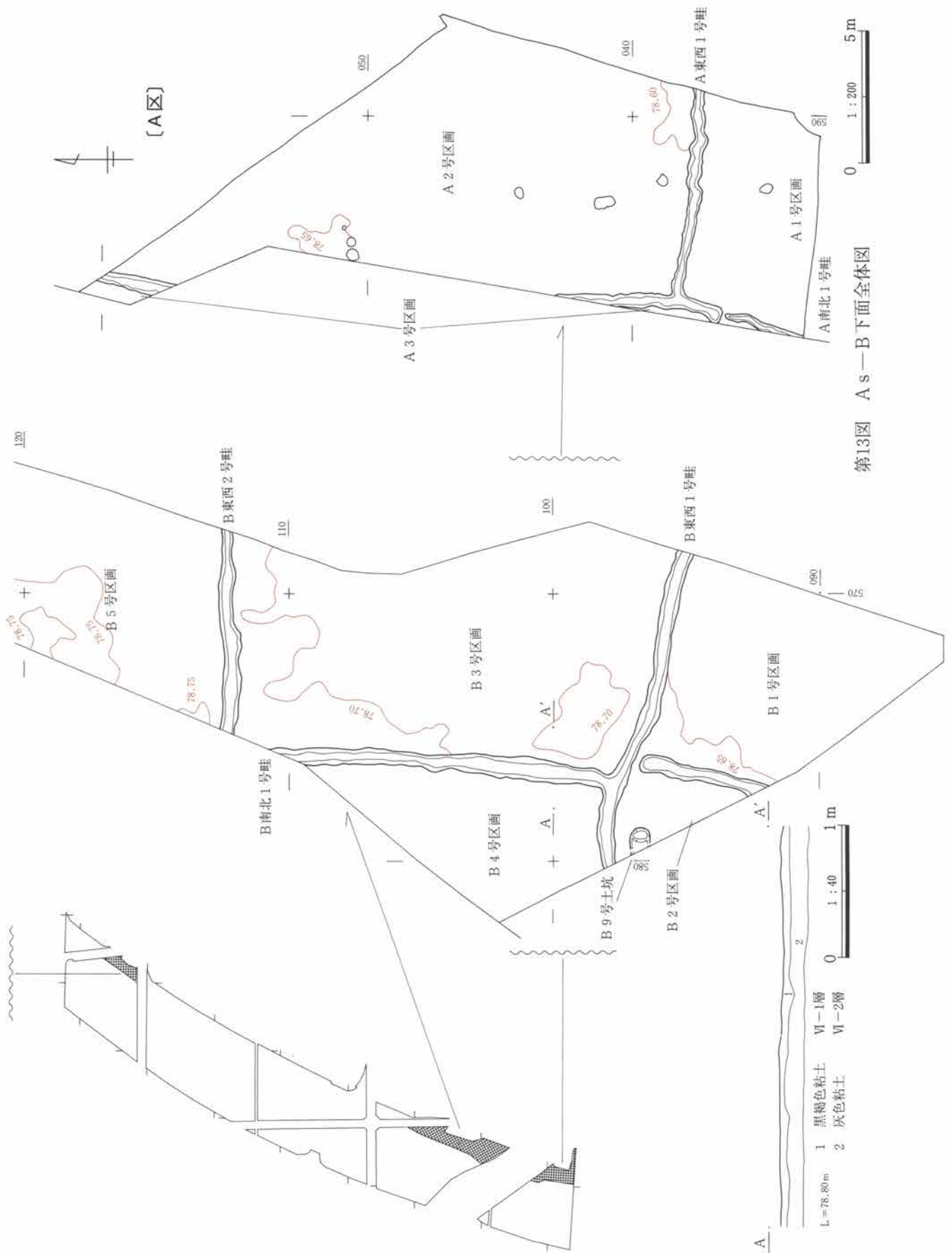
次にVI—2層を除去し、A・B区ではXIII層上面、E区ではVII層上面でそれぞれ遺構確認を行った。その結果、E区ではAs—B下面E 8号溝直下のピット列以外に遺構は確認できなかったが、A・B区では複数の溝や土坑等を確認した。このうちB 3・B 4号溝はAs—B下水田と関連付けられるが、それ以外の性格は不明である。遺構の時期も特定できず、層序からは古墳時代以前から平安時代中期までの遺構が同時に存在する可能性がある。それぞれの遺構が掘り込まれた当時の地表は、その後の耕作により削平され続け、最終的にはVI層が耕作されることで完全に消滅したもと考えられる。

以上のようなVI—2層下面の状況は、古墳時代から古代にかけての土地利用の変遷は勿論、当時氾濫した河川の位置も含めた旧地形の状態等、今後検討すべき課題を示している。

なお、VI層下面のA・B区の遺構については、確認面の層序から本章第6節に記載した。



第14图 灰色粘土下面B3・B4号溝平面图



第13图 A s—B下面全体图

第5節 古墳時代の調査

1 : Hr-FP 泥流 (Ⅶ層) /Hr-FP (Ⅷ層) 下面

〔E区〕

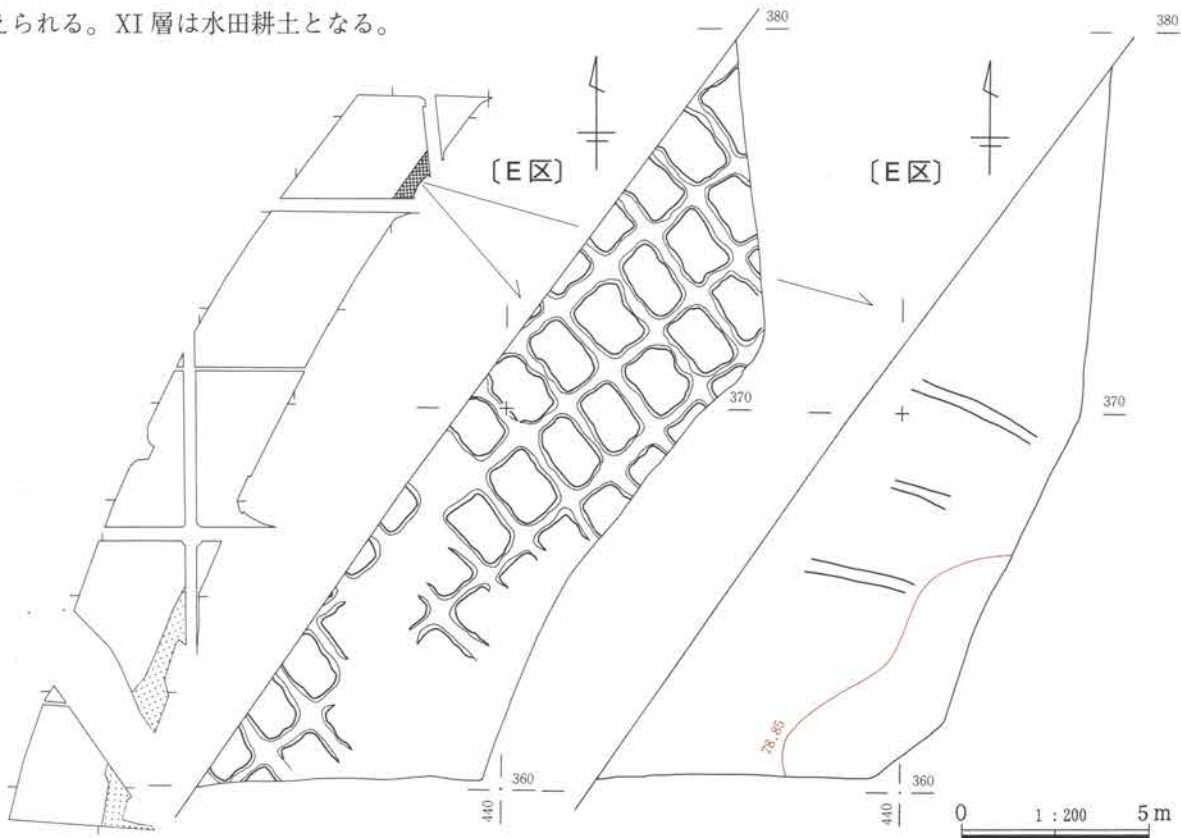
Ⅶ層、Ⅷ層はE区の上に堆積する。Ⅶ層は灰白～橙色を呈しシルトや砂粒が互層堆積する火山性泥流で、層厚約40cmである。また、直下のⅧ層は灰色を呈する降下火山灰で層厚5mm未満と薄く、上下には層厚数mmの炭化物薄層を伴う。この2層を除去し水田跡を確認した(Hr-FP下水田)。これは6世紀中葉のHr-FP噴火当時の水田である。いわゆる「小区画水田」の形態であり、推定42区画が確認された。このうち完形は11区画あり、面積は1.66～2.08m²、平均1.81m²である。畦畔は幅約30cm前後、耕作面からの高さ約3cmであり、長径(タテアゼ)方位はN-40°-Wを示す。耕土は明褐色灰色シルト(Ⅸ層)である。

As-B下水田以降の水田・畠跡が東西、南北方向に区画されているのに対し、この水田跡は北西から南東方向にタテアゼを設けていることが特徴である。これは地形の傾斜に合わせたものと考えられる。水口や大規模な畦畔は確認できなかったが、北西の区画から南西の区画へと配水していたことが考えられる。

2 : Hr-FA (X層) 下面

〔E区〕

X層は黄橙色を呈する降下火山灰層であるが、E区に層厚数cmで部分的に残存するのみである。この層と確認面の灰褐色シルト(Ⅺ層)との土色の違いにより畦畔痕跡3条を確認した(Hr-FA下水田)。幅約30cmで、走向はN-67～78°-Wを示す。これは、6世紀初頭のHr-FA噴火当時の畦畔痕跡であると考えられる。Ⅺ層は水田耕土となる。



第15図 Hr-FP 泥流/Hr-FP 下面全体図

第16図 Hr-FA 下面全体図

3: As-C混土 (XII層) 面

〔E区〕

XII層はE区に層厚約3cmで堆積する。この層を徐々に平面掘削していき、土色の違いにより畦畔を確認した (As-C混土水田)。断面観察の結果、この畦畔は暗灰色シルト (XIII層) が約1~2cm程度高まったものであることが判った。推定14区画を確認したが完形のものではなく、本線部に連続する可能性が強い。

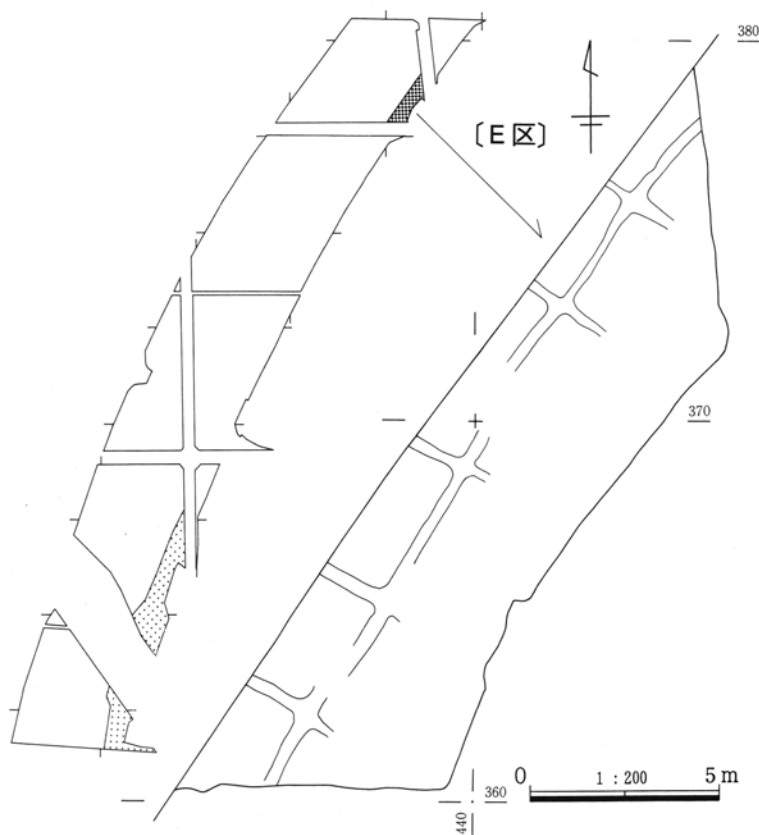
XII層は4世紀初頭に降下したC軽石を大量に含むが、それ以外には砂粒やシルト等の混入はない。従ってこの層は洪水起源のものではなく、降下したC軽石が耕作により攪拌されて形成されたものと理解できる。このことから、確認された水田跡はXII層に被覆されたものではなく、XII層を耕土とする水田の下位部である可能性が強い。畦畔下部は耕作されずに残存したが、上部は後に攪拌を受け消滅したと思われる。

この水田跡は本遺跡で最も古い時期のものである。しかし、C軽石降下後に耕作された事実は判るものの、開田の時期は不明であり、これ以前の水田の存否については確認できない点に注意しなければならない。本遺跡周辺が水田化される時期を検討することは今後の課題である。さらに、水田跡の開始時期を検討することは、あらゆる水田調査に於ける課題である。

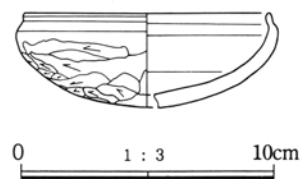
4: 古墳時代の遺物

古墳時代に相当するHr-FP/Hr-FP泥流下面、Hr-FA下面、及びAs-C混土面の調査では、それぞれ遺物は出土しなかった。しかし、古代の調査に於いて、As-B下面E8号溝 (道状遺構) 底部ピットP-1より古墳時代 (7世紀中葉) の土師器坏が出土しており、本項に記す。

本遺物の残存は1/4であり、口径は推定9.6cm、器高は3.7cmを測る。胎土は橙色の細砂粒、焼成は普通である。器形は口縁部は僅かに内径し、口唇部が直立する。成形は外面には口縁部に横ナデ、体部に不定方向ヘラ削りを施す。また、内面には口縁部に横ナデ、体部上部に横ナデ、体部下部にナデを施す。



第17図 As-C混土面全体図



第18図 古墳時代遺物図

第6節 古墳時代以前の調査

1：灰色粘土（Ⅵ-2層）下面

A s—B水田の耕土下位部であるⅥ-2層を除去した結果、A・B区では暗灰色シルト（ⅩⅢ層）上面で溝、土坑等を確認した。それぞれ時期は特定できず、古墳時代以前から平安時代中期までの遺構が同時に存在する可能性がある。確認面の層序から本節に記載した。（本章第4節参照）

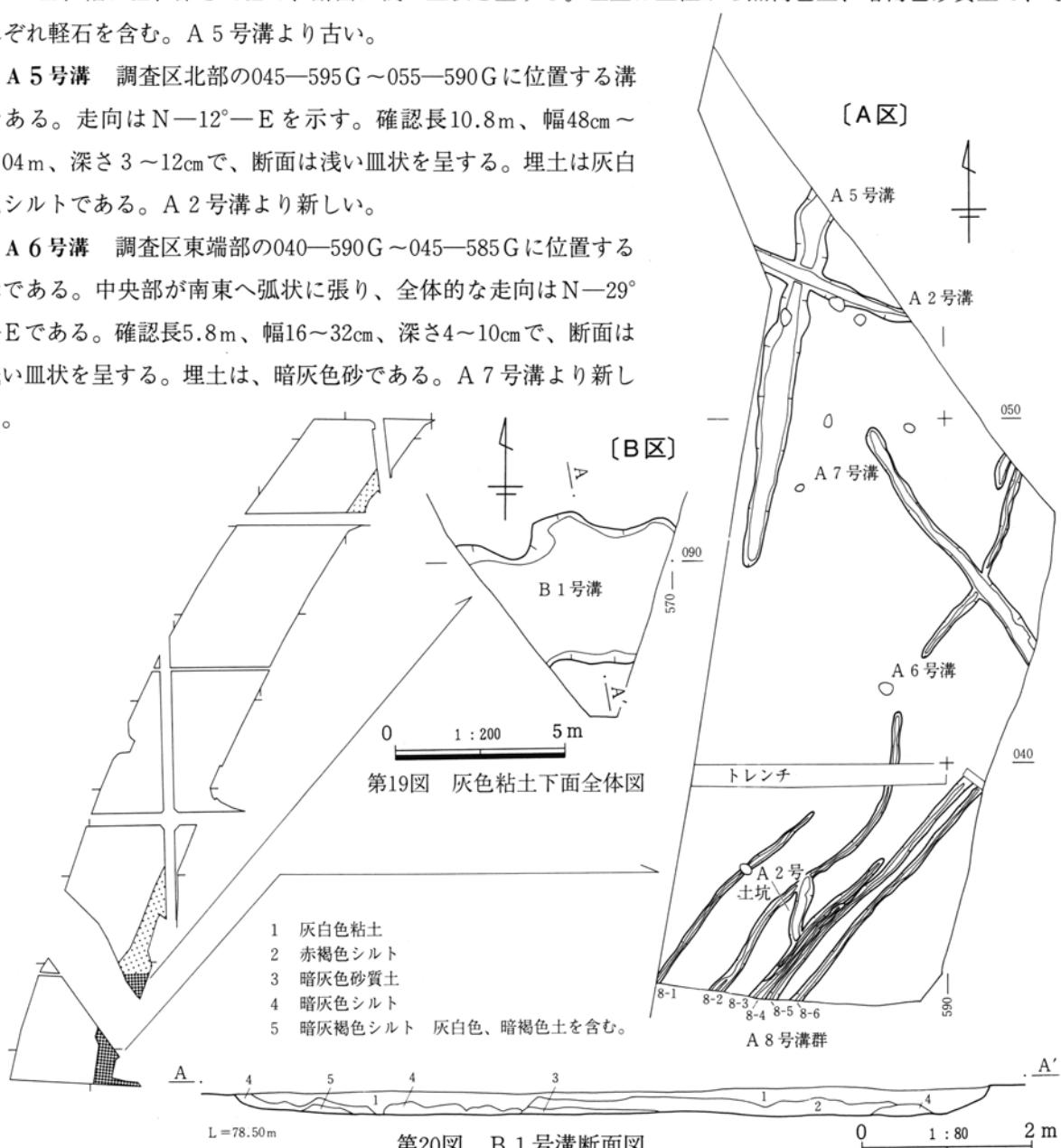
〔A区〕

土坑1基、溝10条を確認した。また円形や楕円形を呈するピットを8基確認した。径15～53cm、深さ5～21cmであり、大半が小規模である。

A 2号溝 調査区北部の050—590 G～050—595 Gに位置する溝である。走向はN—68°—Wを示す。確認長4.6m、幅64cm、深さ15cmで、断面は浅い皿状を呈する。埋土は上位から黒褐色土、暗褐色砂質土で、それぞれ軽石を含む。A 5号溝より古い。

A 5号溝 調査区北部の045—595 G～055—590 Gに位置する溝である。走向はN—12°—Eを示す。確認長10.8m、幅48cm～1.04m、深さ3～12cmで、断面は浅い皿状を呈する。埋土は灰白色シルトである。A 2号溝より新しい。

A 6号溝 調査区東端部の040—590 G～045—585 Gに位置する溝である。中央部が南東へ弧状に張り、全体的な走向はN—29°—Eである。確認長5.8m、幅16～32cm、深さ4～10cmで、断面は浅い皿状を呈する。埋土は、暗灰色砂である。A 7号溝より新しい。



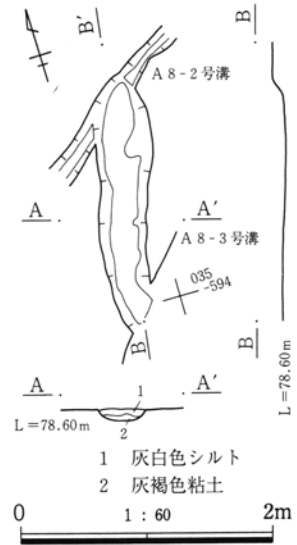
第19図 灰色粘土下面全体図

第20図 B 1号溝断面図

A 7号溝 調査区東端部の040—585 G～045—590 Gに位置する溝である。走向はN—36°—Wである。確認長8.2m、幅20～60cm、深さ3～8cmであり、断面はごく浅い皿状を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土で、砂粒や軽石を含む。A 6号溝より古い。

A 8号溝群 調査区南部の030—590・595 G～040—590 Gに位置し、北東から南西走する6条の溝からなる。走向はN—35～40°—Eを示す。確認長5.5～9.4m、幅8～24cm、深さ3～10cmであり、断面は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰色砂である。A 8-4号溝は埋土に鉄分を含みA 8-3号溝よりも古い。A 8-2～A 8-4号溝はA 2号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

A 2号土坑 調査区南部の030・035—590 Gに位置する。長径2.05m、短径39cm、深さ9cmの長楕円形の土坑になろう。長径方位はN—12°—Eである。断面は浅い箱形を呈する。A 8号溝群との新旧関係は不明である。



第21図 A 2号土坑平・断面図

[B区]

溝3条を確認した。このなかには、本章第4節で述べた溝2条が含まれている (B 3・B 4号溝)。

B 1号溝 調査区南端の085・090—570 G～085・090—575 Gに位置し、東西走する溝である。走向はN—84°—Eを示す。確認長6.4m、幅3.1～4.4m、深さ17cmで断面は箱形を呈する。底面は凹凸が激しい。

2：灰色シルト (XIV層) 上面

最終確認面としてXIV層上面で遺構確認を行った。その結果、複数の倒木痕や溝を確認したが、形状をより明確にするため、さらに数cm掘削した状態で調査を行った。それぞれの遺構の具体的な年代は不明であるが、本遺跡周辺が水田化される以前の環境を示唆するものである。

[A区]

倒木痕2基を確認した。

[B区]

溝3条、倒木痕4基を確認した。

B 1号溝 調査区南部の085—575 G～100—565 Gに位置する溝である。中央部が北西へ弧状に張るが全体的な走向はN—33°—Eを示す。確認長13.8m、幅34～46cm、深さ12cmで、断面は皿状を呈する。

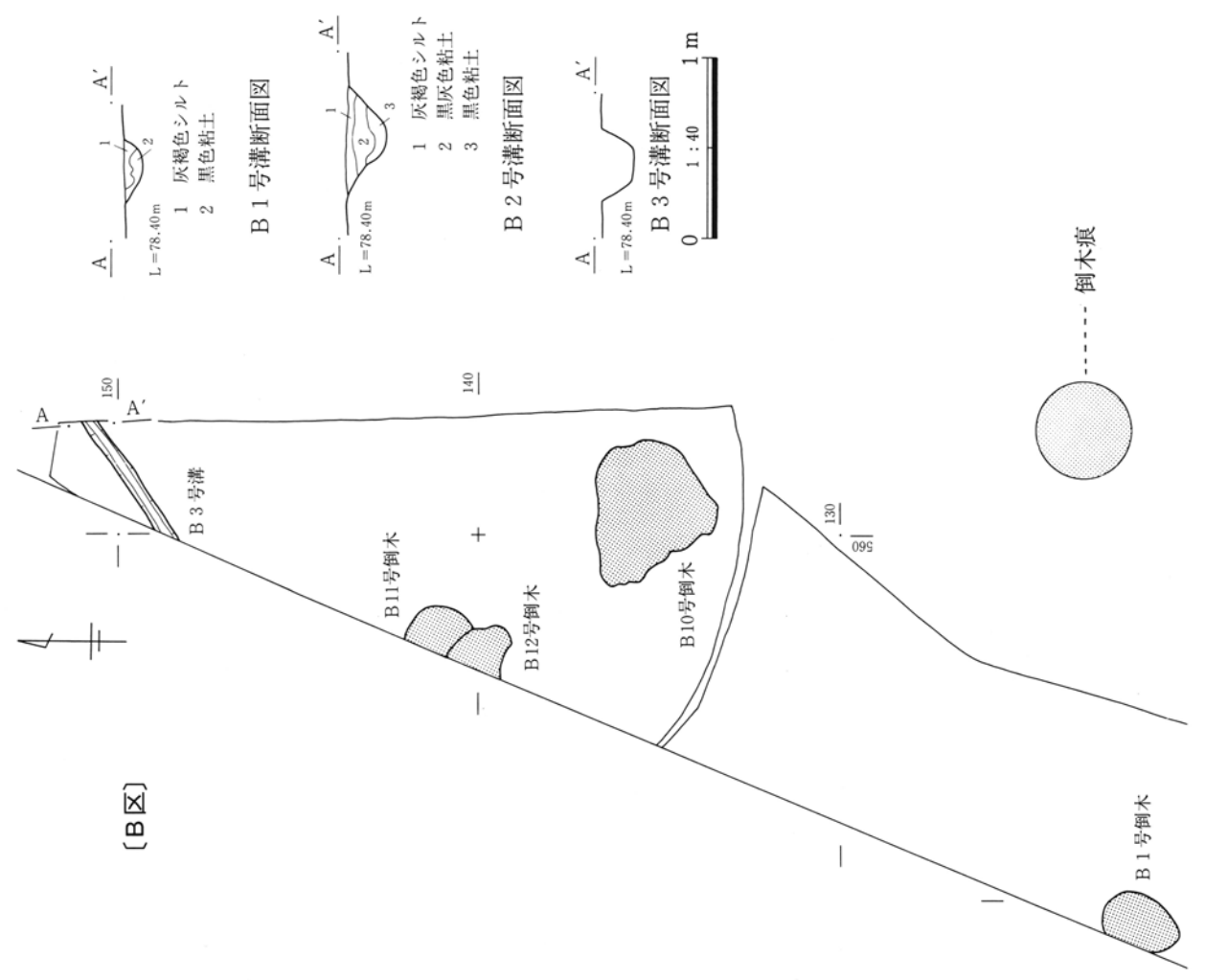
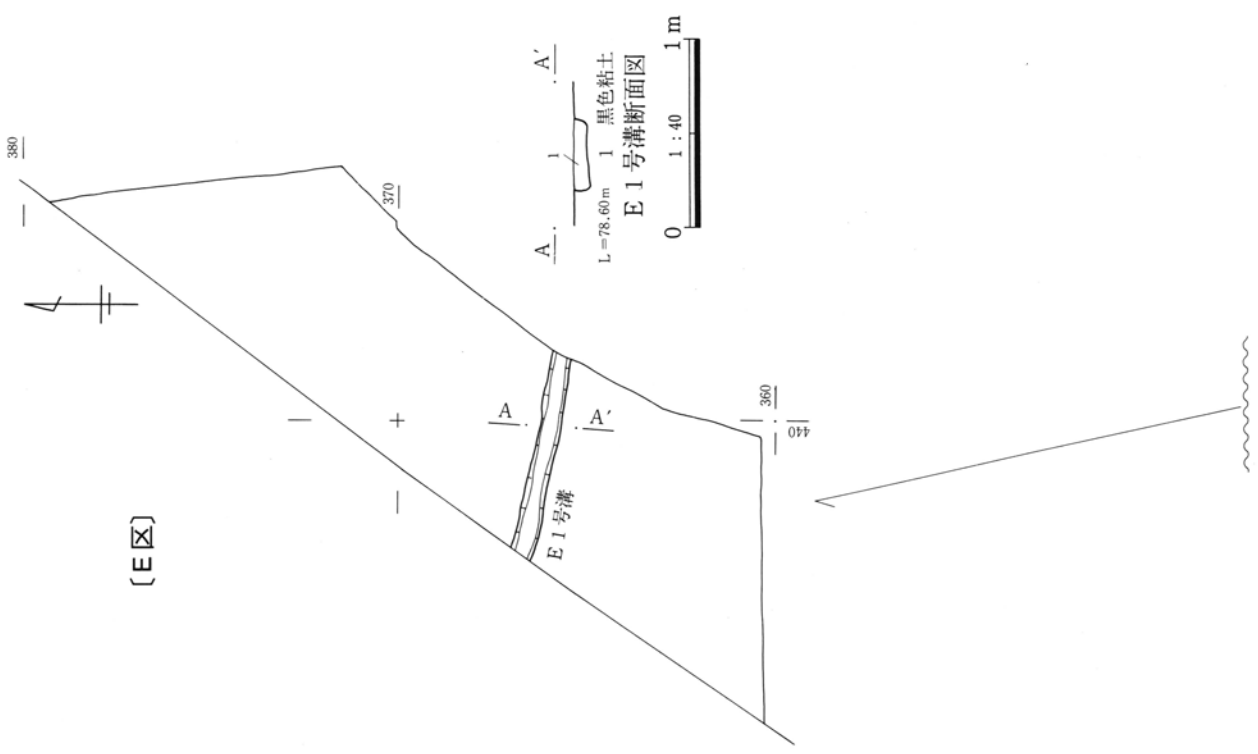
B 2号溝 調査区南部の100—580 G～105—565 Gに位置する溝である。走向はN—77°—Eを示す。確認長11.7m、幅60cm、深さ22cmで、断面は逆台形を呈する。

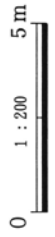
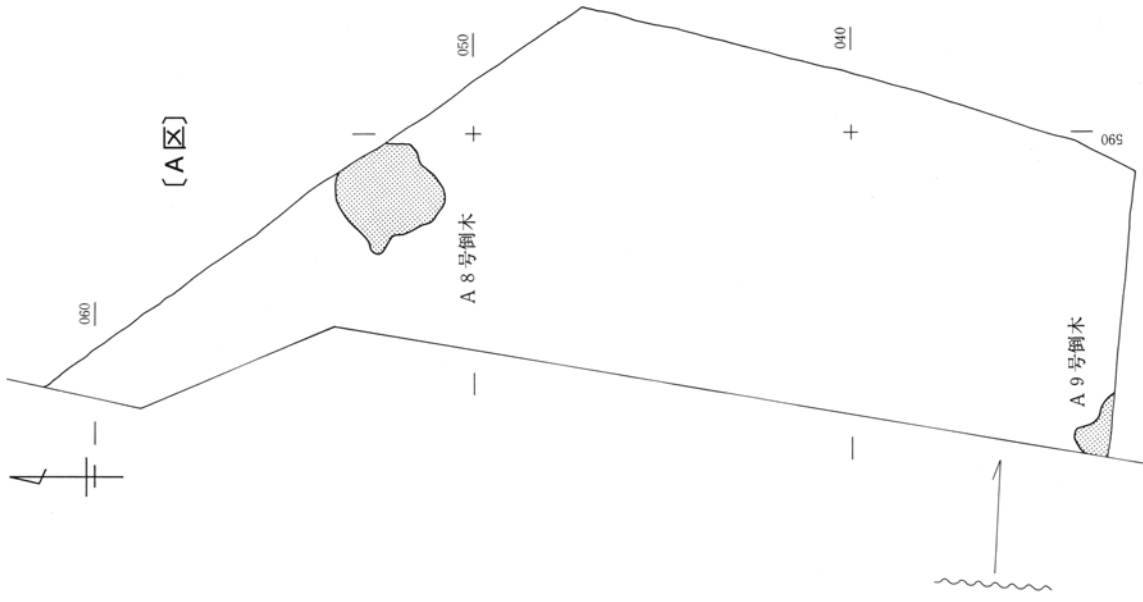
B 3号溝 調査区北端部の145—560 G～150—555 Gに位置する溝である。走向はN—51°—Eを示す。確認長3.5m、幅36～42cm、深さ19cmで、断面は箱形を呈する。埋土は暗灰色土である。

[E区]

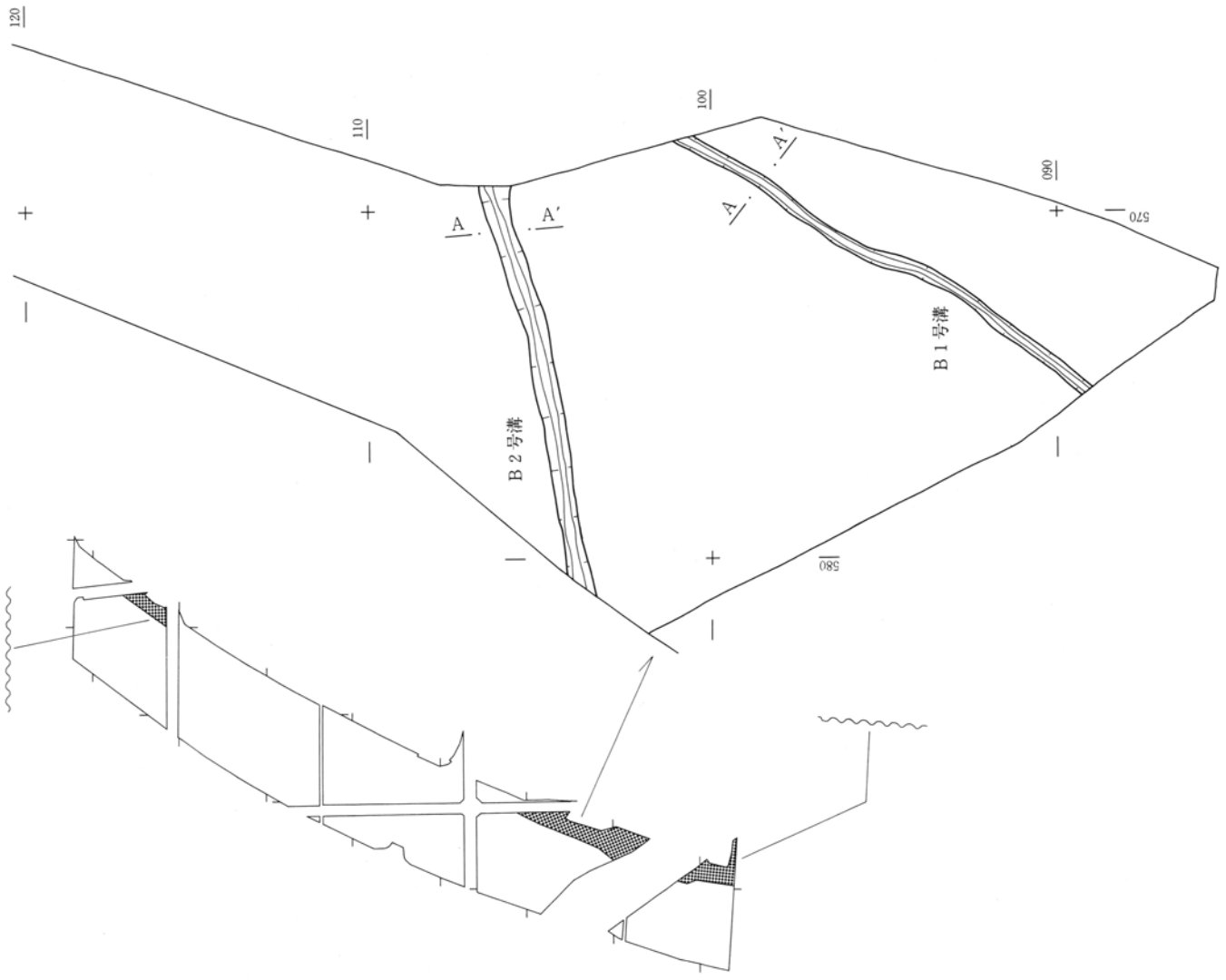
溝1条を確認した。

E 1号溝 調査区中央部の365—435 G～365—440 Gに位置する直線的な溝である。走向はN—79°—Wを示す。確認長5.5m、幅32～60cm、深さ8cmで、断面は浅い箱形を呈する。





第22図 灰色シルト面全体図

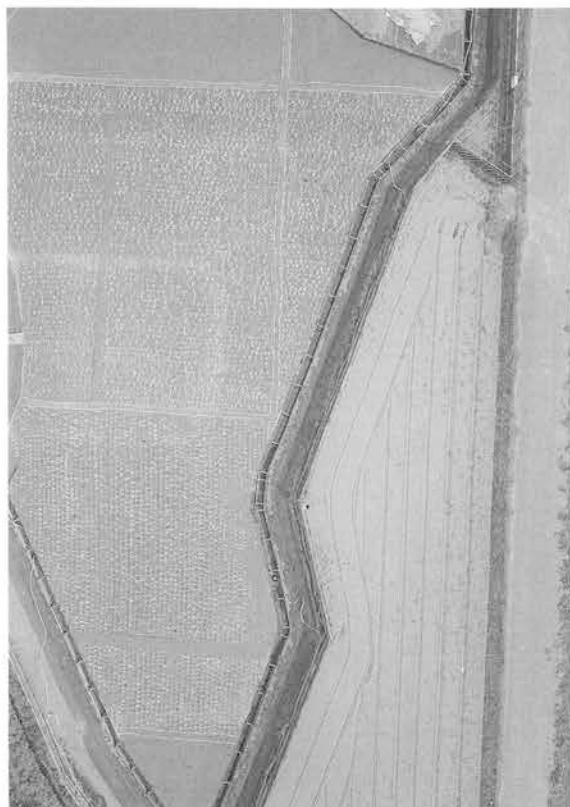


発掘調査報告書抄録

フリガナ	シュクヨコテサンバガワイセキ
書名	宿横手三波川遺跡
副書名	北関東自動車道側道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第247集
編著者名	岩崎 琢郎
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279 (52) 2511
発行年月日	平成11年2月28日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	原因
		市町村	遺跡番号					
シュクヨコテサンバガワ 宿横手三波川	タカサキシ 高崎市 シュクヨコテマチ 宿横手町	10202		36°19'24"	139°4'50"	19960901 ～ 19961031 19971201 ～ 19971231	1,208	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宿横手三波川	水田・畠	近世 中世 古代 古墳 古墳以前	水田 畑・溝 水田・溝・土坑 水田 溝・土坑・倒木痕	鉄製角釘 土師器坏	



1 As-A混土下面B区南部全景



2 As-A混土下面B4号区画農具痕(南西より)



5 中世第2面E区全景



3 中世第1面E区全景



4 中世第1面E区サク状遺構(南より)



1 As-B下面A区全景



2 As-B下面B区南部全景



3 As-B下面B区南部近撮(南より)



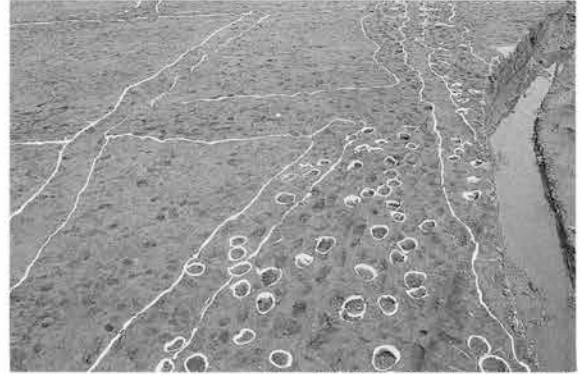
4 As-B下面B9号土坑全景(南より)



5 灰色粘土下面B3・B4号溝全景(東より)



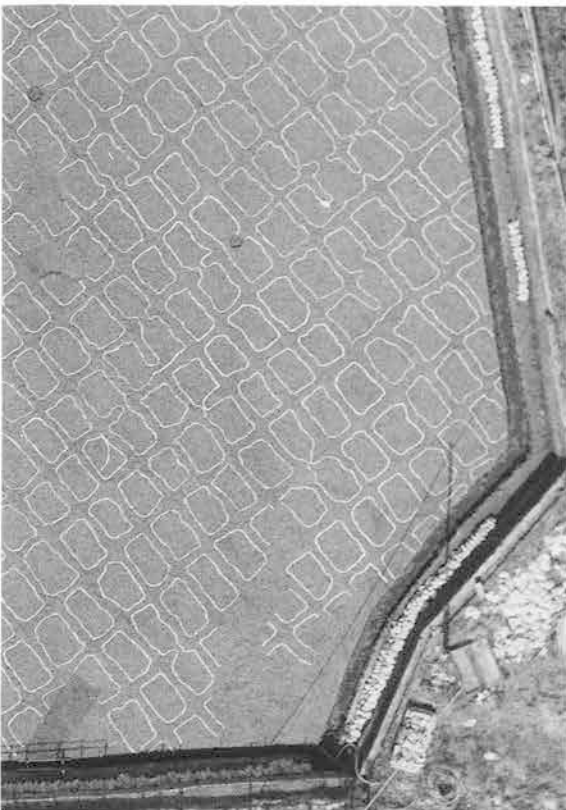
1 As-B下面E区全景



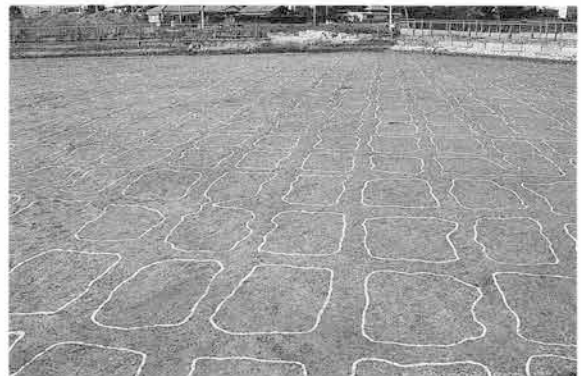
2 As-B下面E南北1号畦付近近撮(南より)



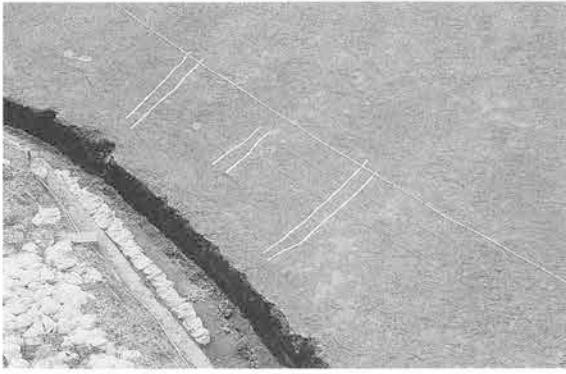
3 As-B下面E 8号溝底部ピット列全景(南より)



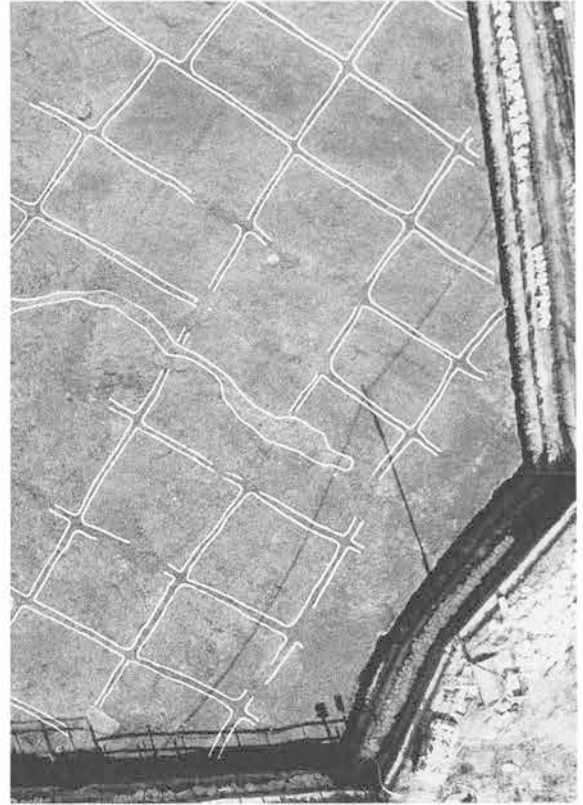
4 Hr-FP泥流/Hr-FP下面E区全景



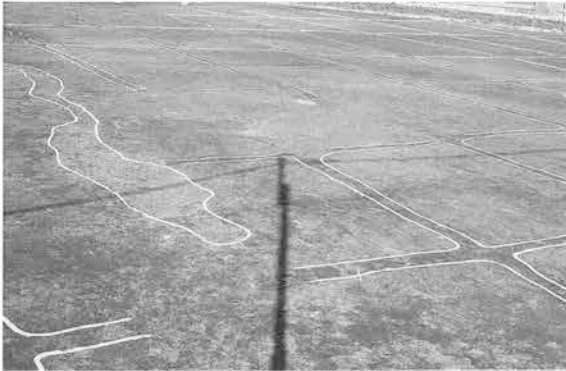
5 Hr-FP泥流/Hr-FP下面E区近撮(東より)



1 Hr-F A下面E区全景 (北東より)



2 As-C混凝土面E区全景



3 As-C混凝土面E区近撮 (南東より)



4 灰色粘土下面A区全景 (南西より)



5 灰色粘土下面B 1号溝全景 (西より)



6 近世出土遺物



7 古墳時代出土遺物

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第247集

宿横手三波川遺跡

北関東自動車道側道建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

平成11年2月23日 印刷

平成11年2月28日 発行

編集・発行／**群馬県考古資料普及会**

勢多郡北橋村大字下箱田784-2

電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／株式会社 前橋印刷所